

平成27年度第3回岡山市総合教育会議

日時：平成27年7月28日（火）

場所：岡山市役所本庁舎第3会議室

○司会 それでは定刻となりましたので、ただいまから平成27年度第3回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、東條委員が御欠席でございますが、岡山市総合教育会議運営要綱第3条の規定により会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○司会 傍聴者の入室を許可します。

<傍聴者入室>

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

まず1の有識者からの意見聴取についてでございます。

本日は学校法人創志学園環太平洋大学理事長でいらっしゃいます大橋様をお招きしております。

大橋様は、皆様御承知のとおり、幼児教育から教育と体育の融合を基本理念に掲げる環太平洋大学を初めとする学校教育、専門教育、生涯学習まで幅広いフィールドで次世代育成に情熱を傾けておられます。

本日は岡山の子どもたちの教育の向上のために、忌憚のないお話をお聞かせいただけるものと存じます。

大橋様、どうぞよろしくお願いたします。

○大橋 事務局の皆様も教員の方が多いんですね。先生が多いですか。

○大森市長 教育関係と、あとは市長部局と。半分半分というイメージでしょうか。どちらかというと、市長部局のほうが多いですね。

○大橋 岡山に大学をつくりましてから今年で9年目に入りました。それまでは岡山という、四国が私の母親の里なんで、岡山を通ると白くおいしそう、だけど高い桃があるなというのが最大のイメージだったんですけど、それ以外はいいいイメージも悪いイメージも特にないというのが岡山だったように自分の中では思っているんです。

今来てみて、さっきこのお話も聞いて、教育で少しつまずいてらっしゃるというので、

そういうことを気づいて、実はこちらへ来て初めてびっくりしたような感じで。岡山とか長野というのは、私たちのころは教育県として非常に名を馳せた県ですから、そこが今何となくつまずいておられると言うことで、どうしてそんなことになるのかなというのは、ちょっと見ながら今日まで来ました。

もちろん岡山だけじゃないと思うんですけど、何かするとき、本気でやるかどうかということだけじゃないかと思うんです。本気なのというところですよ。

私は、今、環太平洋大学の経営をしていますけど、本気でやっています。本当に自分の人生の集大成だと思ってますから。10年が終わった時に、環太平洋大学というのはどういう大学なのかを皆さんに見ていただけるよう、仕上げていくのが自分の1つのタイムリミット。だから10年で切ると。自分の1つ、今、タイムリミットを決めてやっている。

10年経てばこれくらいはできるのだとか、こうなりましたとかを見ていただくのに、私にとっては長くもない、短くもないぐらいの時期かなと思うんです。

半面、他からは10年で大学をつくるなんて急ぎ過ぎだということも言われるんですが、だけでも10年が急ぎ過ぎだというんだったら何年だたらいいんでしょうかということになると、何年たっても切りがない。20年たってもまだ大学ができる途中ですということ、多分うちもそうかもしれません。

どこかで1つの設備と学部なり学科なりの、それから卒業生の進路というものが、しっかりとした形としてあらわれてくるという時期をつくらないといけないと思うんです。

それができてから、より発展していく、成長していくというのはあってもいいんじゃないかなと思うんです。その期間を10年と置いてます。今8年と半分ぐらいです。あと1年半です。

ですから、10年間というと1つの大学がある程度でき上がっていく期間だということ考えて、岡山市も育成条例ができて、もう大分いい年数たってますよね。そういうものも、基本的なものがあるんだから、条例に書かれていることを本気でやったら。私も読ませていただきましたけど、とてもいいことが書いてあると思うんです。

ただ、これ本気でやってるのかな。物すごくいいことが書いてある、言葉が並んでるんですけど、このことを誰がつくったのかな、誰が納得してどこまで現場の先生方や、

あるいは岡山の市民、お父さんお母さんがこれを知ってらっしゃるのか、理解してらっしゃるのかというと、恐らく本当に少ないんじゃないかという気がします。

先生方の中でも育成条例を本当に理解しているか、読んだかということからいくと、ひょっとしたら余り記憶にないとか、読んだことがないという先生方がいらっしゃっても不思議でない気もしているんです。

というのは、あそこに書かれていることを本気でやろうよということで、みんなが一致団結したら何か変化が出たと思うんです。だけど、その本気度が私は足りないような気がしているんです。

そうした中で1つの提案は、楽しい学校づくりとか、そういうことの1つ大々的な打ち上げをしてしまって、後からそれを形にする。不登校やいじめがなくなるとかいろんなことで、そういうことを含めて、もし楽しい学校と言うのであれば、表現はもっといい表現を選んでいただいたらいいと思いますけど、やっぱり学校が楽しくないと全ての問題解決しないと思っています。

その中で1番やっぱり学校が楽しいなと思っていただかないといけないのは先生方だと思うんです。先生方は学校が職場ですし、学校に1日に10時間、11時間とかいらっしゃるとか、今日、副校長は13時間ぐらいいるとかいろんな統計が出てましたけども、それだけ長時間いる学校が自分にとって楽しい職場でないとなったときに、そこでのどういう成果が出てくるのかということ、そんないいものは期待できないような気がするんです。

ですから、まず先生方が楽しい職場と思えるような環境整備で何があるのかということをとことんまで突き詰めて、それを本当に本気で解決していくことをみんなでやらないといけないんじゃないかと思うんです。

偶然ですけど、今日の統計を見てたら、文科省だとか何かにレポート書いたり、研修のレポート書いたり結構負担だということもあります。それはよく言われていることだと思います。

先生方の中でそういうものもあるんですけど、「雑用に追われてね」という表現を時々聞くんですけど、学校で行う業務を「雑用」と表現するのも私はちょっと納得できないところがあるんです。何で学校の仕事が雑用になるのか。では、先生方にとって雑用でないものは何ですかということだと思うんですけど、恐らく1番は、生徒、子どもたちと触れ合ってる時間、これは、自分はこのために教師になったんだという

時間もあるし、そこで教師冥利に尽きるようなことが次々と展開されるんでしょから、子どもとの距離が離れていく作業ほど雑用になっていく。

1番遠く感じるのは文科省から来たアンケートに回答していくとか、ひょっとしたら教育委員会に出す書類についてというのは、どんどん子どもたちから遠くなっていくのかもわからない。そうするとそれが雑用になるかもしれない。

雑用をやっていて楽しいという人はいないんですが、だけどこれも、先生方がそう思ってる内容が本当に雑用なのか、不必要なことなのかをとことんまで突き詰めてみる必要があるような気がするんです。

民間の企業でよくするのは、1分刻みぐらいの表がありまして、何時何分から何時何分まで何をしたかということを一週間ほどずっと書かせてみると、とんでもない生活を自分はしているとか、これは自分の業務とは違うことに結構時間かかっているとか、準備しておけばもっとこれ短く済んだのにとかいろいろわかるんですが、学校の先生方も一度思い切って、全市で朝一番、7時ぐらいから晩の7時ぐらいまで1分刻みぐらいの表を渡して、みんなが一度書いてみる。

そうすると、本当に雑用なのか、要らないことなのかということを見てみて、いや、実はこれは雑用だと思ったし、こんなことしなくていいと思ったけど、これは絶対要る業務だよなというのはどれなのかということと、本当にこれをすることが学校として、教師として最優先でないといけないのかというものが逆に言うと見つかってくるんじゃないかという気がするんです。見つかったときは思い切ってそれを削除するというのを、教育委員会ができるかどうかだと思うんです。

どこかで先生方が、今まで負担だと思うものをとことん話し合いであれ、そういうアンケートに協力するかわりに納得できる妥協点というのをどこかで見つけないといけない。それによって先生方の発想を変えないと、日本全国同じ問題でしょうね。

その中で岡山市が浮かび上がっていくというんだったら、岡山だけ違うんだというものを何か目指していくことを明確に打ち出して、そこをやっていかないといけない。

何とか都市宣言だとかいろんなものがあるんですが、非常に美辞麗句が並んでいるんですけど、中身的に非常に乏しい。何をしたらそれをつくったことの効果があったということになるのかということが明確に書かれていないことがありますから、どうしても宣言はするけども、そこから先の、どうなったらつくったことの目的が達するのということですけども、往々にしてつくることが目的になってしまって、つくって

それを実行することはただ単なる手段であって、目的は最後のところにあるんだという、この目的を忘れてしまうんじゃないかな。これ、一般企業も一緒だと思うんですけども、人間の生き方もそうだと思うんですけど。

そのあたりで、先生方と、岡山市がどういう教育をしたいのかということ、その中において先生方がどういう役割を担ってほしいのかということと、それをやれと言うんだったらこうしてほしいという先生方の声なども含めて、本気で教育委員会と一般の先生方も含めた話し合いをもっともっとやっていく時間がないとだめじゃないかなと。まずこれが1番なんです。

ここで解決できていく事柄というのも確実にあるような気もするんですが、まだまだ先生方だけというわけにいかない。だけど、先生方が学校にいる時間があって、子どもと接する時間がふえてきて少し楽しくなってきた、学校も親とのトラブルがなくなってきたということになれば、楽しくなってきたら、絶対的に変わるのは子どもが変わります。

昔から、先生方が変われば学校が変わるとよく言われますが、まず、岡山の先生方が学校を自分の職場として楽しいと。プライドは持っていらっしゃるんでしょうけど、楽しいという思いを持った生活をしていくと、次は子どもたちが変わってくる。

先生が忙しいからとか何か言って、今日だめとか言って、どこかでそばに寄ってくる子どもたちを外さないといけないような時間を持つてるとか思いがあった場合に、子どもたちは学校が楽しいか。明日も起きたら1番に、とにかく学校へ行こう、誰よりも早く行くとか、誰々ちゃんと一緒に早く授業始まる前に行くんだという学校にみんながなってきた、それと同じように、朝でも早くても出てくる。それが平気だという先生が少しずつ少しずつふえてくることによって、ひよっとしたら朝早ければ夕方もう少し解決して帰っていけるかもわかりませんし。

学校が、楽しい先生方と楽しい子どもたちというのを、どういう形で作るのかというのが1番かなと思うんです。楽しかったら学校は休まない。何で学校を休むのか。それは楽しくないからです。楽しくない理由はいろいろあると思うんです。先生方との関係もあれば、友達との関係もあるし。時には、余り言わないけど、実は数字の上では出てますし、ここの分析などにもありましたけど、家庭の問題が不登校の中において物すごく大きな比重がある。そこは余り家庭をみんな言わないから、学校に問題があって不登校になってると言われると、どうしても不登校の数を減らさないといけ

ないということにまた今度はなってくるので、どうなったら不登校が減るか、どうして数字を減らすかという、また工夫をしないといけないところも出てくるわけですから、子どもたちにとっての学校が楽しいという学校にできるのかどうなのかというのが、私は教育委員会なり、もっと言えば市そのものと先生方と、そして子どもたちとの関係の中でつくり上げていかないといけないんじゃないかなと。

それを本当になさってるのかな。不登校の数が多いとか、あるいは校内暴力が多いと言うけど、とことん校内暴力絶対許さないという姿勢をどういう形で意思表示をされたのか。毅然とした態度が出てこないと、実際の表に出てきているいじめは、実際からいったら3分の1か4分の1じゃないかと私は思っています。

実は、いじめられていることを先生に言うというのは大変な勇気だと思うんです。いじめられてるんだっらいじめられているということをはっきり言って、必死になって親が語るなり守ってやらないと、子どもは学校へ、今日はどうしようかなと思って迷うことはあるじゃないかと。それで言うともっと何倍かになって返ってくることもあるんだし、お母さん同士の仲も悪くなるんだしと。怖がってるからそうなるんであって、いいと。思い切ってやれよと言ったときに、受けとめてくれる学校があるかどうかというのは物すごく比重が高いと思うんです。

もしもだめだったとき、学校がそれに対してしっかりとした対応をしていただけなかったら、本当に子どもにとってはもっとひどい地獄がそこに来るかもしれない、もっとひどくいじめられるかもわからないと思ったら、やっぱり言わないですよ。

亡くなった子どもたちがいたら、後になるといじめられていたのをみんな見てたとか何とかと言うんですけど、何でそれがわからないのということと、なぜもっと勇気を持ってそれを言わない。あるいは、言っても先生が対応しなかったというのがあるとすれば、そういう例が出てくると、なおのこと、その県だけでなく、日本中、今の時代テレビですぐ情報来ますから、子どもたちにとってはうっかり先生に言っても、先生がそれに対してしっかり受けとめてくれなくて、問題解決まで持っていってもらわなかったらもっとひどい生活になるんだと思ったら言わないということが、私は頻繁にあると思います。本当。

だから、これをどういうふうにして解決するのかというのが、本当に先生方と教育委員会なり、あるいは市長の陣頭指揮で本当に解決しようと、この数は尋常じゃないんだということをやっている中で、少しずつでも保護者もいろいろ仲間に入ってきてと

いうこともあり得るのかもわかりませんが、一番最初はやっぱり先生と教育委員会に、あるいは市長部局とが一体となって本気で毅然とした態度で問題解決に臨んでいくということじゃないかと思うんです。

学力が少し試験の結果として好ましくないというものがあるようですけども、これも学校が楽しくならないと成績は上がらないと思うんです。過去問を繰り返してやれば点数はとれると思うんですけど、ただ、過去問繰り返してやって上げた点数は本当に誇れる点数かということから考えたら、もっと真正面から、本当に、岡山をもう一回教育都市として世の中に訴えていくというぐらいの勢いを誰が持つのか。

でなければ、結局、現場の先生方が、教育委員会からこうしたらということと言われてプリントをこなして行って、過去問をしてということで行くんですけど、1番は現場の先生が本気にならないといけない。教育委員会から言われるから何かやらないといけないからやっているというのは、人間誰でも楽しくないじゃないですか。だから先生方が本気になるか。その本気にさせるにはどうするかといったときは、私はやっぱり教育委員会も一緒になってやるからということでない、もっと現場こうしたらどうだ、ああしたらどうだということで行って、ひょっとしたら、ここはわかりませんが、教育委員会と先生というのは結構距離があるのかなという気もするんです。

それは何も教育の世界だけでなく、警察でも所轄の警察と県警本部というのはすごく距離があると聞いたことがありますけど、教育委員会と学校というのもすごく距離感があるかもしれない、先生方から見て。

そうしたときに、教育委員会の委員ということじゃなく、教育長も含めて教育委員会の指導主事もみんな含めて本気だよということを、どういう形で現場におろしていいのかを考えることがまず1番であって、それをみんなが理解してきて、そして現場でまた話をして行ってやって、一見無駄なようですけどそれを繰り返して納得したらその後の先生方の動きは早いと思うんです。そこを省略して、何となく教材はこういうものを使ってみたらどうですか、副教材これだったらどう、過去問こういうものがあるしということで、時間的にはそんなに時間かかりませんが、その後の成果はそれほど出ないと私は思うんです。

まず、先生方が楽しい学校と思うような環境づくりを本気でできるかどうか。そこで先生方の発想が少し変わって、ここまで教育委員会も本気で自分たちの生活を考えてくれるんだなということをしていく。それで幾つか教育委員会の報告事項がなくなっ

た。あれなくなっただけで楽だよなというものが、ひよっとしたらあるかもしれないと思うんです。

組織というのは、うちなんかでもですけど、結構仕事がある。何がそんなに忙しいのと。理事長には伝わってないと思うんですけど、報告のペーパーが結構あるんですよと言われると、やっぱりあるかと言うんです。

法人本部では、現場がどうなっているかというのは数字で見たいからとか、あるいはどういう対策練っているとか、どういう企画があるかというのを常に知りたいというのがあるんですけど、それを文書で求めていくと、結果的につくるためのものに時間がかかってきていることにすぎない危険性があるような気がするんです。

公教育ですからできない部分もあるのかもしれませんが、校長先生の役割というのは本来はもっと大きいと思います。だけど、何となく2年ぐらい無難にいくと、そして最後の2年か3年はつつがなく校長を終われたら、最後の最後で何か事故に巻き込まれないように、と思われる気持ちはわかるんですが、学校のトップは校長先生ですから、副校長先生はいかに大変かというのは文科省の発表の中でもありましたけど、校長先生だって楽できる仕事、そして最後の仕事が校長というのは絶対に違う。校長先生にどういう権限を与えるかということが次にあるような気がするんです。校長先生にしっかりとした権限がない限り、学校に1つの方針がしっかりと発表されて、学校ごとにユニークな活動が根づいていくということはないんじゃないかと思うんです。

公立学校ですから、余り差があってはいけないということもわかるんですが、ただ最低限度押さえることを押さえたら、その先は各学校ごとにいいよという権限をどこまで校長先生にも、あるいは各学校にも与えるかということも大きいような気がするんです。先生方が楽しいということからいえば。

私はニュージーランドに1990年、国際大学を創設しましたので、よくニュージーランドに行きます。また、学校見学に行ったりするんですけど、ニュージーランドの特徴は、学校にぼんと予算来るんです。そうすると、先生も保護者も寄って、この予算をことしは何に使うかということのを学校の中で真剣に会議する。

私は、ある晩その会議に出てくれというので出ていったんですけど、学校からはコンピューターを入れ替えたらいこうだということを教育委員会から言われたけど、コンピューターは使えるんだから、それよりは、臨時でいいから今年1年間先生を入れてもらおうと。先生1人いるほうが絶対的にいいということを親と先生方が一生懸命話を

して、予算の計画を立てて使っていくことになるんですけど。日本の今の高等学校、あるいは今の小・中学校の義務教育でどのくらいの予算が学校の裁量の中で使っているのか。あるいは、校長がどこまでの枠を持ってやっているのか、ということをお私には正確には知りませんが、校長として校長先生が仕事をできる環境整備というか、権限に何があるのかということで。校長になりたいけど、その前の副校長で疲れるからそこまでいくのもどうかと、若い人がうっかりそんなことを考えてきたら、学校経営を本気でやる校長先生はますますいなくなってしまう気がするんです。

学校経営というのがあっていいはずですから。経営は10社あれば10社ビジネスだったら違うわけですから、公教育も10校あれば、ある部分については10校が違うというものを、枠があるかどうか、裁量権があるかどうかということも、先生方が本気で自分の学校経営に参画するかどうかにかかってきているような気がするんです。

これももう一度、もっとあったほうがいいなということ。全部一緒、おもしろくも何ともないです。公教育だからというけど、冒してはならない一線は絶対にありますが、その先はある程度地域の差もありますし、生徒の数、大きい小さいがありますから、思い切ったものを校長先生に任せてみるという。校長になると楽しいよなというものが何か出てくると、もう少し若い人たちにとっての頑張りというのがあるんじゃないかなと思ったりもしています。

ここまでは大体学校について、学校を楽しくしませんかということですけど、その次は学校を楽しくするために、私は大学生を使うべきだと思うんです。本学は教育学部もあります。教育と体育の融合ということでやってきたから特に思うんですが、今の大学生、使うと使えますよ、結構。子どもだ子どもだと言うんですけど、本気でやらせて任せてやると、本当によく考えて組み立てをするということが、今、学校ボランティアというのがあるんですけど、どの学校が何名来て、どういう仕事をして、どういう役割でどうしているのかというのがどこかに資料があったら私は見せていただきたいと思うんですけど、もっともっと、岡山市は日本で1番、大学生と一緒に組んで学校づくりをする都市ですと言っても損はないです。そこまで言ったら、大学生は本気でやってくると思うんです。

私は運動会のプログラムも本当は、先生もですけど、毎年同じものじゃなくて、毎年1つか2つは違うものを入れよう、その中に大学生も入ったらいいし、大学生がやるんだったら地域の人も誰でもいいから、保護者であっても何でもいいから入ってもら

って、プログラムから運動会つくり上げていくというような時間があって、それをやってもらって、そしてそのための練習なども大学生が手伝って、そして集団行動の練習や当日の白線も引いてというようなことになっていけば、絶対に先生でないといけない仕事は先生がしますが、先生でなくてもできる、学生だったらなおいいという仕事については、例えば大学生に運動会も全部任せてみるということが1つあり得るんじゃないかと思いますし、任せると期待に応えます。今の大学生たちは。

これが実現すると、岡山が日本で1番、大学生が学校づくりに参画しているということが言えるようになると思うんです。大学もたくさんありますし。各大学が競って、それに対して協力しようと。来た学生が、岡山に来てよかったと。岡山の高校生が岡山から外に出るといのはたくさんいます。だけど、岡山にとどまるには、大学が競い合って強烈な競い合いをして、そこに1つの成果が出てくればいいと思うんです。

今、私たちは教員採用試験をいろいろやっている。教育委員会の先輩の先生方も来て、先生方はお盆もずっと休みなしです。小学校の校長先生のOBですけど、そこまでして下さいます。全部発表が終わってからお礼の食事会をしたときに、何で盆まで教えに行くのと家では言われることもあるよとか言うんですが、やっぱり教えてると、学生たちが必死になると楽しいし、だから来ていただける。

これが今度新しく教育委員会ができる。そしてまたそれぞれのところが、きのう電話がかかってきて、ほかの学校も先生方のOBをたくさん採用してみんなやるですよと言うから、いいことじゃないと。それでやって、みんなが頑張って、みんなが全員そろって岡山しか就職がないんじゃない。大阪を受けに行ってもいいし、東京を受けに行ってもいいし、神奈川でもいいし。うちだっていっぱいあっちもこっちも行ってんだから。岡山の大学の卒業生が1番たくさん教員採用試験に通る、率的に通るということがあったらいいんだから、別に私はいいことだと思うよという話をきのう電話でしたんです。わかりました。そういう考え方に変えたらいいですよねと言うから、そう、みんなベテランの先生が、学校はそんな楽じゃないよというところからうちで話しておられます。そんな夢みたいな話持っていくなよと。絶対苦しいこともいっぱいあるけど行くのかという話から、それで教育実習に行くと、帰ってきたら大体、やっぱりよかったです。感動するんです。教師になりますと言うけど、だけどよく考えたら、それで行って、何で1年目か2年目で辞めるの。

教育実習は、いわば学校からいったら、ある短期間で来たお客さんかもしれない。子

どもたちも知ってますから、この人は来ていつか帰っていく、その間お兄ちゃんとしてつき合ったらいいけど、その人が教員になって次来たら担任になるんですから。これは全く親も子も、去年までのお兄ちゃんと、今年の先生とは位置が違う。真正面から子どもたちもぶつかって、親も電話がかかって明日行きますからとか言われたら、明日朝起きたら熱出てないかな、子どもの不登校と一緒にだと思えるんですけど、そういう状態になっていく、この変化というものに今の大学生が気づかずに、教育実習の感動だけで教員採用試験を受けて通ってもすぐ辞める。

何故何年間も準備してやって、そして辞めていくんだと思うんですが。本学なんかも、教員採用試験一生懸命やってるというから、東京の教育庁の実際の採用担当課長が来られたことがあるんですけど、わざわざ大変ですよ、岡山まで来られてと言うんですけど、採用しますでしょう、目の前をうわっと流れていくように辞めるんですよという表現をする。コンベヤーに乗って流れていくように辞めるんですよという話をする。そんなに辞められますかと言うと、辞めます。だから、最初はほかの県へ採りに、大阪に行ったらいろいろ文句言われたけど、もう今は言われなくなったから、この後、私は福岡に行くんですと言われてましたけども。せつかく採用試験を一生懸命頑張っていて、そして教育現場に夢を持っていった子たちがなぜ辞めるのかということ考えたときに、私は大学生のときに、もう少し現場の苦しさも、そして苦しいことがあってもこれを乗り切ったら絶対楽しく行ける、先生になれるんだという夢を持てるような期間をもっと持ってみたらいいかなと思うんですけど、それが大学生を学校に入れませんかということなんです。

今、大学生はボランティアで行ってますけど、あくまでもボランティアでばらばらなんですけど、これを大学生の1つのリーダーをつくらせて、各大学のリーダーが寄ってきてきちっと話し合いをして、そして順番にいてそこに組織ができていって、みんな頑張って岡山を絶対にいい教育のできる街にしていこうという目標を大学生が持つ。そのバックアップに、大学の先生方がつく。

大学の先生、教育の先生もたくさんいらっしゃるんですけど、一度も現場に出たことがない、一度も保護者から文句を言われたことがない、明日行くのを休もうかなと思った経験もない人たちがそのまま教育の先生になって、教育学を教えてらっしゃる先生もたくさんいますから、私は教育現場を知った先生方に来ていただくという努力をして来ていただいているのはなぜかということ、教員を目指している大学生のときに、

教育現場をもっともっと語っていく。いいことも悪いことももっと知らせていくということですが、その中で本気でやる子たちは岡山の教育のこれから頑張っていくことに参加しようよというようなことを言って、参加をさせていく。そして集まってきたらリーダーが出て、教育委員会が出て、ありがとう、一緒にやろうというようなことで片っ端から握手してでも頑張っていく、それが市役所の大きな広間でもやって、今日からやるぞという一種の結団式のようなものでもできていく、学生たちがリーダーになって、そして学生たちが動かしていく、先生方に何に困ってますかと、我々何が1番いいですかと、そして学校の中に入っていくことによって、1番は保護者対学校の関係が、そこに大学生が入ることによって少し緩和されると思うんです。

今だと、何かあったら即学校の先生と親が当たる。だけど、そこに学生たちが絡んでいく、日ごろから、先ほど言いましたように、例えば体育祭のプログラムと一緒に組み立てましょうよということをやっている中であれば、もろに学校の先生にぶち当たっていくことだけでなく、何となくその中で消化していく関係もできるし、また、先生には言えないけど、大学生といえども子どもにとって先生とかお兄ちゃんとか言ったら、一度聞いてくれると、こんなことあったのよということも大学生でも私は保護者に言われると思います。

私は、こども教育支援財団という不登校の子どもたちの学校復帰支援活動をしている財団法人の理事長をしていますが、不登校の子どもたちが不登校に今なっている小中学生のお父さん、お母さんたちの前に出てきて、自分はどのような理由で不登校になって、どうして今はまた頑張っているか、どうして前へ出てきているかという話をいろいろして、お母さんたちが質問するんですけど、終わりましたら、その子たちのところへ、お母さんたち、先生と言うんです。

高校生や大学生の子に、先生ちょっとお伺いしていいですかというぐらいに、そのところで。だから、先生というのは年長とか何とかじゃなくて、経験者だと。自分たちより物事を知っていると思ったときに、親は、不登校経験があって頑張っている子たちに対して先生という表現を使って、その子の周りをぐるっと取り囲んで、そしてそこで話を聞いてもらう。あるいは質問をして、その子が答えていくということも日本全国でやっていますが。そういうところを見ていると、親が学校の先生方となかなか思い切った話ができない、行くときにはぐっと腹をくくっていきますから、結局はぶつかることも多くなってくる。

保護者と学校がぶつかるための場でしかない学校というのは寂し過ぎますから、もっと開放した形の学校と保護者の関係というのをつくり上げていく中においても、大学生を使うべきじゃないかと私はとても思っています。

もしそれ決まれば、本大学は、もろ手を挙げてやりますが、私は就実大学さんだって参加されると思います、岡山理科大学さんだってされるでしょう。いろんな大学が絶対参加されますよ。私は理事長会でも一緒にやりましょうという話もできますし、教育長なり委員長なり市長も来て、一緒にやりましょうと言っただけであれば、もっと勢いがついてくるんじゃないかと思うんです。

8年間やってきて、学生というのはやるなど。任せればこれだけのことができるんだということを私は体験をしてくれていますので、どうぞ、できればそんなところで、大学を使っていただいて、大学生を使っていただくという1つ今日は御提案をしておきたいなと思ったりもしています。

こうした中で、岡山から来るよりも岡山以外から来る人も多いですから、卒業しても残りたくなる岡山というのが大事な気がするんです。卒業したらとっととふるさとへ帰って行くよりも、岡山に残ってみようかな、岡山の先生になるかとか、岡山の会社で就職したいという思いを若者たちが持つ岡山市というのは、私はすばらしいと思うんです。

何かのアンケートで、老後暮らしたい街という中で岡山が2位のアンケートがありました。岡山市って2位に上がってくるんだ。そういえば晴れの国って、私も、本当に晴れの国を実感しています。月曜日に大学に行くと、学校に来たら毎朝120段の階段の上に立って朝挨拶するんですけど、雨が降って傘を差すというの、1年間で、その日は本当にみんなで今日は珍しいですよねと言いながら傘差すぐらい朝、雨降らないですよ。気候温暖で、非常に雨も少なく、落ちついた街ということから考えて、老後は岡山もいいかなと思う人がいる半面、若者がいいという街に変わっていくという比重が高い。

それには、学生時代に岡山に思いをいっぱい残させないといけない。いろんな取っかかりをつくらないといけない。いろんな学校の活動の中で誰々さんと親しくなったとか、あそこのおっちゃんと一緒にプログラムつくったよとか、運動会を一生懸命やった、最後の打ち上げも一緒にやった。このようなことがいっぱい重なってきて、岡山に残ろう、岡山で就職しようということを大学生同士が話をしていく。企業も喜ん

で採っていただける街になってくれば、ちょっと岡山というのは、違った意味での街ができ上がってくるかな。

ですから、せっかく気候温暖でいいんですから、ここで残って、ここで結婚して、ここで子どもをつくってという街としての可能性としては、私はほかよりもあり得るような気がするんです。

気候の物すごく厳しいところだってありますよね。大学終わったら早く帰りたいというところの大学だって、そこで頑張ってる子たちいるんですけど、じゃあ卒業したときにそこで職を求めようと思ったらあるのかといたら、ないところもあるかもしれません。気候の厳しいところに比べたら、岡山はとていいじゃないですか。

私も、岡山に来てとていい街だなと思ってますし、妻とも岡山、うちの誰か孫がうちの大学へ来てそのままここで住みついたらいいよなということを。私たちは、最初はそんなに岡山に来なかったんです。最近、日曜日はお昼から岡山に行こうというので、妻と一緒に来ます。岡山の街、案外歩いてみると、本当に小さなきれいなお店がたくさん今できてきてますし、大雨でとか大風で散歩するのが苦痛だということを感じたことがないほどいい気候です。

ぜひ今言った若者たちを、大学生を、学校改革改善の中に入れてもらうことによって、岡山にいろんな思いがつのってきて、ここで就職をしたい、ここの先生になりたいという子たちもできて、そんなにみんな通らなくても、落ちてでもレベルが上がっていきますから。そういう思いの子たちがたくさん、学校を知った上で先生になりたいという子たちがふえればふえるほど、最初に入ってきてても教育もしやすくなってくるんじゃないかなと思ったりもするんですけど。

ですから、ぜひ、若者が残りたくなる街づくりということからいっても、大学生を学校改善の中に入れていただいたらどうでしょうかと思ったりします。

最後になりますが、私は、今回の教育委員会の大きな改革は、もともと市長部局があって、教育委員がいてということですけど、田舎へ行くと教育委員というのは選挙の論功行賞というか、一生懸命頑張ってくれて終わったら教育委員にしてもらったみたいなポストの役職の意味があったところもあります。

それに比べて今回は、責任を持つ人は誰かということは明確になったと思うんです。もともと選挙の公約の中にも教育というのはあるわけですから、教育行政というのは物すごく大きな都市づくりの柱なのに、なぜか首長は教育に直接的にタッチできない

という今までの形態があったのが、今回は変わりましたよね。

ですから、私は大森市長がここに来られて、最初にも言いましたけど、市長が本気で物を言われていいと思うんです。私は、国土交通省出身で、文科省じゃないというようなことは、全然関係ないと思うんです。だって、教育受けている人はみんな各分野全部いるけど、じゃあ何人、教育のプロで、誰を教育のプロというんですか。誰が教育をわかっているというんですか。先生以外は教育のプロじゃないんですかといったら、圧倒的に教育、先生以外の人がいるわけですから。

そうすると、その中の1人である市長がここを見てきて、とりあえずこうしようや、なあ教育長さんということをはっきりと意思表示されることじゃないですか。

やっぱり市長が語るより、何か考えてよと、案を出してもらって、みんなまとめてもらってというのは弱いと思うんです。今の岡山は、それではだめだと思うんです。それでよかったら直ってきたんですから。何となくまだ直りづらいと思うんですか、まだ問題解決しにくいなと思ってるところは、私は、市長がはっきり話して、教育委員長あるいは教育長に、私はこれで行こうと思うんだと、どう思うということ言われたらいいと思うんです。

それに対して教育長が、いや現場はこう、そうだけどうじゃないのかというぐらいの、多少の議論をしながらも、教育行政の責任者は市長なんだということの自覚を周囲の人にもしっかりと持っていただくということじゃないでしょうか。

私は、ここまで国家的な仕事をしてきた市長がものを言われて、そんな大きな間違いは、教育といえども起こるとは思いません。むしろ下手に気兼ねされれば、何のために大森市長をこの市長としてみんなを選んだんだということから言ったら、私は何となく期待外れだなという部分があるような気がするんです。

分野が違えばそれは当たり前、みんな違う分野で働いているんですから。だけど首長になった以上は、今回は教育のトップですから、自分の権限の中において最も比重の高い教育に自分の思いを語られる。そのための勉強会をされるのなら、先生でも誰でも、個人的に先生今の教育の問題教えてほしいとか帰って本を読まれるとかした中で、間違ってもいいから、プロじゃないから間違ってるかもしれんけどねと、私はこうしたい、これできるか、これやってくれということ言われたら、教育長らも、よし頑張りますという勢いでいけるんじゃないですか。

執行責任者としては市長がいるし、下にたくさんいるし、結局そこに中2階みたいな

ところにいるよりは、私は市長とがっぷり一緒だという意識を持ったほうが、教育長はどういう思いか知りませんが、もしもそうだったら、市長がそこまで言ってくれるんだったら俺はやるぞとか、市長とここまで意見闘わせて結論出たんだったら間違いはないんだという思いを持って教育長が執行されたらいいし、教育長が自信を持って語られたら教育委員会が自信を持ってくると思うんです。

最初に戻りますけど、本気でやるんですか。何となく文章ができ上がって、きれいな言葉が並んでましても、それで教育変わるんだったら、もう岡山の教育は変わってます。なぜそれが変わらないのかと言ったときには、私は真剣度が足りないと思います。

何が真剣度かと言ったら、さっき言ったように、本当に先生方が嫌がっている仕事は何か。それだけは勘弁してくださいよというのは何が嫌なのかとか。これは要らないでしょうという仕事は何なのかということをしつかりと聞いて、これはやっぱり今まで報告たくさんとり過ぎたなということ、レポート上げろと言ったのもやめるかというのものはやめて。そのかわり、あなたたちは責任持てよと、教育に。今度は教育の責任はあなたたちが持ってもらうんだからという中で、じゃあ自分たちで全国の学力の習熟度を上げるにはどうしたらいいかというのは、現場が本気になってそれぞれの学校で語らない限り上がらないですよ。

鶏と卵みたいなところはありますが、現場が理解できたら自由にさせてあげるよというのはあるかもわかりませんが、また逆に言えば、もっと自由な時間、拘束された時間が少なくなると、もっと自分たち頑張れるよと先生方も思ってるかもしれない。

この辺の教育委員会と現場とのすり合わせに対してすごい時間をかけられたほうが、後々楽できるんじゃないか。多少意見交換中のトラブルが起きるかもしれませんが。しかし、意見交換の場が重要です。だけど、行き着くところは生徒のためにということ为原则に置かないといけないと思うんです。自分たちの生活保障のためにという時代は終わってると思うんです。そういう時代では必要性はあったと思うんですけど、だけど今、本当に生活のためにということを必死に思っていて、苦しい、その給料で食べていけない先生がどれほどいるんだといたら、私はそんなことはないと思います。その保障はもうできたんですから。

それよりは、これから先というのは何を議論してもいいけど、1番の行き着くところは子どもたちだと。そのためならどんな議論でもしようやと。大声でも出そうよと行って、結局、最後行き着いたら、よしこれで行くと言ったら、大声も何もかもそれは

それで終わりにして、子どもたちのためにやるぞと決める。そういう時間、教育長、そういうタイプだと思いますけど。何度かお会いするたびごとに、これは旗を振って本気になったらこの教育長強いなと本当に思います。いろんなタイプの方はいらっしゃいますけど。どこかそこで、市長と教育長が、市長が考える教育は何かということをよく議論されて、本気でやろうと、これは。今までの人ができなかったが私はやると。私の任期中にまずやってくれということ、はっきり言われることだと思います。そのためにこうしたらどうだ、これはできるのか、これはできないのかということをどんどん言われたらどうでしょう。

優秀な教育委員会の事務局の人たちもそろっているんですから、市長さえ方向を決められて、本気度を見せていただければ、私は岡山の教育は大分変わると思います。その本気度のために、今、幾つかのお話をしましたけど、ひとつかふたつは先生方と違うことがあるかも知りませんが、岡山だからできる教育、それをすることが結果的に岡山に大きく返ってくる活動があると思います。もし何か決まってやられるときは、環太平洋大学は全力でお手伝いしますから一緒にやらせてください。

ありがとうございました。

○大森市長 ありがとうございました。

御意見を各委員からお伺いする前に、最後の大橋さんのお言葉に対して私からもコメントしないとイケないんじゃないかなと思います。

実は、私としても教育というのをどうこれから持っていくのかというのは、まだ模索中です。学力向上、問題行動減少、そういう抽象的なことではもうイケない。美辞麗句を述べても何の意味もない。具体的に何をすることなんじゃないのか。決めたら、そしてそれを、大橋さんの言葉をかりると、本気でみんなでやっていくことなんだろうと思います。

ただ、この方向を決める、これはさまざまな意見もあります。私自身も考えはもちろんないわけではありません。これだけ生きているわけですし、それなりに教育に携わったこと、直接じゃないですけど、携わったこともあるわけなんです。

ただ、一度そこで方向を決めていくとなると、当然ながら生徒に大きな影響を来す。そのためにはやはり、私は余り短期間で直感的にやるというよりは、自分の考え自身は大切にしながらもいろんな方の意見を聞き、これだと思えるのができて、そこから本気で行くということなんじゃないかなと思っています。

そういう面で今日の大橋理事長の御発言、非常に共感を受けました。本気になってるのか。本気でやってるのかという裏には、まだまだ本気でやってない面もあるんじゃないか。そして、学校は楽しいのかといったときに、楽しくないと思っている先生もいるんじゃないかというようなことの、多分、裏返しとしておっしゃってるんだろうと思います。

その言葉の背景、そしてどうやったら本気度をませるのか、そして楽しく、私も何とんでも先生だと思えます。先生を楽しく本気にさせられるのかということを考えていかなきゃいかんような気がします。

私としては、質問はどちらかというところと教育長とか教育委員会のメンバーに今これから質問したいようなところもあるんですが、とりあえず私の役目は議長の役目もありますんで、各委員の皆さん御質問があればお願いをいたします。

曾田さんどうですか。

○曾田教育委員会委員長 理事長さんありがとうございました。

とことんというところで、今まで少し遠くから理事長さんを拝見したり、IPUを拝見したりする中で、なるほどなと思いました。

すぐにやらないといけないなというのを、今、思ったんですが、1つ御質問させてください。IPUの学生さんはすごく生き生きしてるんです。生活圏があのあたりなので、スーパーマーケットで会ったりとか道で会うときに、みんな生き生きしてるんです。多分それには先生が生き生きしてるのかな、元気なのかなという感じがするんですが、そのあたりの何か注入しておられるようなことがあったら教えてください。

もう一つ、入学式のときに、私は参加したことないんですが、合格発表があってから入学式の間、IPUの学生に成り切っているというのを皆さんから聞くんです。そのあたりで多分、学生さんが生き生きとしたり、社会貢献に目覚めたりするヒントがあるのかなと思うんです。教えてください。

○大橋 私は教育機関というのは語り部が要ると思うんです。誰か1人がここの教育は、ここに大切なことはというのを常に語らないといけない。創立以来、私がおその役をしてるんです。ですから、1年生は毎週月曜日の1限目が体育学部、2限目が国際教育学部ですが、毎週学部集会をします。250人と300人ぐらいですけど。毎週それをして、そこで毎週いろんな話をしていくんですが、その中でよく言うのは背筋を伸ばして目を見なさいとか、目で聞いて目で語りなさいとかいうことでやりますし、ですから120

段の階段の上で待ってても、上がってきておはようございますと言ってもそうです。ちょっと待てと。それはいいけども、もう一つもったいないよと。階段上がってきてとまって、おはようございます、おはようございます。こうしたらどうと言うと、するんです。それが格好いい、それが挨拶やと言うと、その子に言ってるようでその周りにずっと伝わっていつている。生徒たちが覚えたらそれをやっていく。小学校のときに大切だと言ったことを、今、改めて1つやっているというのは、うちの大学じゃないかなと思うんです。

私は前へ立って、250人ですけどぴしっと目線合わせてきます。そのかわり自分もきちっとずっと目線を合わすようにしていきますけど。それが1つと。

2つ目は、いろんな分野で責任持たせたプロジェクトを次々組んでいくんです。先ほど大学生を使ってくださいよと、学校でと。今度の運動会任せるよということで、何名かに任せてもらったり、お父さんお母さん一緒に来てプログラム考えましょうやと。学校の先生ではない、サポートしている大学生と一緒に組んで組み立てをしていくとか、そういうことについてすごく頑張っていて、小さい学区ですけど御津学区といふこの地域の運動会はほとんどうちの学生たちが毎年毎年参加して一緒にやらせていただいているのが、創立のときから続いているんですけども、責任を持たせると大学生もします。

それから、1番は教育と体育の融合というので、体育会が多いということです。そのかわり、体育会、その子たちが憧れるような監督、コーチがそろっているということも大事だと思います。ことしからやっているメンター制度がありまして、大学の教員と体育の監督、コーチと一緒に、メンターという役になって1人20名ずつぐらい預かるんですけども、この20名は、大学の教育の中に大学の先生でない人たちが入る。ただし、これは正規の大学の時間ではないです。プラスアルファの時間ですけど、メンターの時間があって、そこでメンターから褒められたり叱られたり、そんな苦しいことやらやら言うなど、俺が世界大会出たときはなとかいう話を聞いたりしながらやっていくことで、守らないといけないことをしっかり守らせていることと、責任を持った仕事はしっかり責任を持たせていくことと。

それから、学生たちにとって憧れるような人たちが先生の中に、先生も現場でやってきた先生方が教育を語ると、やっぱり違うね、先生、先生やってきたからという、暗に先生一度もやらずにやった先生と違うなど学生は言うんですけど、そんなような、

学生から見ていいなという先生を学生の前に出してやることかなと思うんですけど。

○曾田教育委員会委員長 ありがとうございます。

先ほどの責任のあるプロジェクトに物すごく共感して。今これからずっと話題になっていたり、解決していかないといけないことに、多分、学校現場の責任の所在というので、頭から責任の所在なんか言ったら責任転嫁のようなことで行ったり来たりすると思うんですけど、本当にその気になるような仕組みをつくったり仕掛けをつくるのが要るんだなと改めて感じました。ありがとうございます。

○奥津教育委員 今日は大変よいお話をありがとうございます。

お伺いしたいなと思ったのは、大学生の活用ということで、学生の将来を考える上でも有益だし、子どもにとっても恐らく先生だけじゃなくいろいろな人とのかかわり合いか、より年の近い、ついこの間まで座っていた側の人と触れ合っているいろんな話をしたりということでもいい影響があって、楽しい学校という意味では1つ有効な発想なんではないか。もちろん、今もある程度ボランティアのような形であるんですけど、それをもっと膨らませるといふか、責任を持たせて、より深く関与していくべきだというお話だろうと思うんですけども。ただ、どうやればそういうふうに具体的に実現に向けてやっていけるのかなというのが、なかなかイメージがつかみづらいところがあるので、もうちょっとその辺。

○大橋 学校行事も幾つかあるじゃないですか。私は運動会の話ばかりでしたが、文化祭というか今何というかそういうものであったりとか、遠足であったりとか、そういう行事面の組み立てあたりから学生が入って、そしてお父さんお母さんが入って。もうでき上がったものに乗っかってくる運動会。行ったら全部できていて、うちの子どもがどこで出るかということだけのお父さんお母さんじゃなくて、ことしは1つだけ親がつくったプログラムを何か入れませんかということを考えてもらうことを学生は上手にするとすると思うんです。

先生方とやると気兼ねする、お父さんお母さんが。こんなこと言ったら笑われるんじゃないかなと思う。だけど、学生との関係ぐらいの年齢だったら、いろんなことが言えると思うんです。

学校行事に、まず参加できる範囲内で思い切って参加させてみる。事故が起きたらとかいろいろあるんですけど、それはしょうがないですから保険を掛けて、それからこういうことをやっちゃいかんということをも文化、だからある程度の組織化が要るん

です。学生たちが来たら、好きな時間に好きなことをやったらいいんじゃないかと、やってはいけないこと、守らないといけないことをきちっと教えていく。それがある程度続くと学生の上級生が下級生に教えていく文化が学校の中にできてきますから、それができてきたらそんな大きな事故も私は起きないと思います。

学校行事を少し委ねてみるのがいいのかなと思っています。

それから、部活をやっている先生は土曜日でも日曜日も働いて苦にならない先生も多いですが、反面、もう少しスポーツをしたいんだけど、リーダーがいないことがあるなら、大学生の中には、レギュラーはだめだけど教えるんだったらやりたいという大学生はいっぱい、どの大学にもいます。そんな学生たちが来て、何かの種目を指導すればいいのです。今、体を動かせば知能が活性化するという研究が大分出てくるようになってきました。それは正しいんだということが。

ですから、そういう面での、学校の中における学校の先生がちょっとできない、そういう先生がいないところをカバーできるような大学生というのも、何名かチーム組んでやらせてみてもいいんじゃないかなと思ったりもします。

○塩田教育委員 本当に有用な話をありがとうございました。強いリーダーシップと強い理念というのが、全てを徹底させていく上で非常に大切なんだと改めて感じています。

ただ、こういう状況にあっては、教育委員会も徹底してやるということを今年度はアクションプランの中に取り入れたりして、だんだんそういう思いが高まってきているのかなというのは自分自身、教育委員会の中にいさせていただいて感じているところでもあります。

先生の今のお話を聞いて、それをどんどん押し進めていくことが大切だということを確認いたしました。

私も大学で教員をしているんですけども、学生をどう使うかというのは、とてもやりたいことなだけで、難しい課題だなと思います。初めてですけども、今年、医療現場でボランティア活動をすることを始めたんですけども、やっぱり大学生をまだ信用できないというところがありまして、大丈夫という声かけをするんですけども、たまたま今日出てくる前に1年生に会いましたので、「大丈夫、行ってこれる」と言ったら、「先生、もう任せてください」と言われたので、本当に信じて任すということ、今お話を聞いていて私も反省しているところです。

本当に任すというところを大切にしたいなと思いました。

○大橋 大学生、頑張りますよ。しっかり任せるといえることを言えば。

○山脇教育長 ありがとうございます。

一言聞きながら、やり方も含めて、自分自身に腹というか、胸にずしずしと来る内容でありまして、先生が言われた楽しい学校、それは教師が楽しくないとならない。私自身は、ちょっと言葉は違うんですけど、数年前から元気な学校、元気な子どもと。結局、教師が元気がないといけませんし、子ども自身が元気で学校の中で過ごすということ。

何が1番大切なのか。楽しくなる、また元気になれるのは何かなというので、これまでいろんな、先生も言われた学力だけに限っていけば過去問のようなこともありますけれど、そうではないんだと。やはり、必要な、1番教師として考えなければならないのは、子どもが参加できる、子どもたちが楽しく感じることができる、わかったと言えるそういう活動、授業というものをしっかりしていくべきではないかと。

ところが、今、先生言われたとおり、まだまだ本気に教師がなれているのかどうかというところが1番のポイントではあるのかなとは思うわけです。

本気になるためにはどういう仕掛けをしていけばいいのか。今、理事長は学生に対して毎週語りかける時間があるって、その中でいろいろモチベーションを高めていく。そしてまた、任せたらやらせる。責任ある任せ方をしていくということ。これも大切なことだろうなと。

子どもたちも小学生と中学生でも、任せればやるんです。学生さんとはまた違うかもわかりませんが、ある任された任せ方をしていけば自分自身にやり切ろうとするところもあって、私も中学校で体育会を見たところ、私、小学校の教員でしたから、中学校で初めて体育会を見て、いつもやんちゃな子どもたちのフォローを一生懸命やるんです。それを任されてるんです、その場で。あなたはリーダーですよと言われて、リーダーとしての動きを自分なりに工夫しながらみんなを集めていく工夫をその子なりにやりながらやっている。

そういう任せ方の工夫というのも1つ要るのかなということも思いました。

もう一つ先生、本当IPUの学生さんは私ども最初、大学できたときから、先ほど委員長も言われましたけど、元気がある。先ほど先生言われたように、憧れる先輩といえますかコーチ。古賀選手とか、それからラグビーのヤウチさんとか、いろいろ憧れる

方がコーチ、監督でおられるというのはあるのかもわかりませんが、多分それだけではなくて、そこには何かもっと、学生さんが本気になって元気よくなる仕組みとか仕掛けみたいなものがあるのかなと思ったりするんですけど、先生いかがですか。

○大橋 たくさんの要素があると思うんですけど、本学は前期と後期と終わったら必ず表彰式やるんです。学長賞とか。学科長賞から始まって学部長賞とか。小学生にするのと同じようですけど、皆勤したら皆勤賞というのを学科長が1人ずつに渡していくんですけども。そんなことも、出てきたら一緒にちゃんと写真を撮影して、写真を添えておうちへ送って行って、今回こういう表彰を受けられました。なかなか見せられませんから、表彰状、親には。だからそれを、ちょっと縮小したのを片面やって、こっちに褒め言葉を書いて、おうちへ写真と一緒に送っていくということもしていくと、親のほうから、あんた表彰状もらったらしいねと言うと、先生から直接褒めてもらうのもいいですけど、親に言ってくれたというのは学生たちはうれしいですよ。

だから、あの手この手だと思うんです。本当に。これでもかというぐらい工夫しながら学校経営していくというのが。私は10年を1つの区切りに置いてますので、そんなところだと思うんですけど。

今難しいのは、学校の先生が褒めると、誰を褒めて誰を褒めないというのがいいの悪いのでいろいろあると思うんですけど、だけど一般企業は褒めますよ。頑張った社員に対しては。ですから私は、いろんな形でそういう機会があってもいいんじゃないかなと思うんですけど。

今回の運動会で1番頑張った先生を子どもたちが投票しようとかと言って、物すごく頑張った先生に運動会頑張賞、賞状をあげても構わないですし。先生だからみんな平等で優劣つけないという時代でもないような気もするんです、もう。

考え方の違う方々いらっしゃるかも知れませんが、やっぱり頑張った人は頑張ったというのを認めてあげてもいいんじゃないかなという気はします。

○山脇教育長 元気にし、次に向かって進めるためには、今言われた褒めるのは1つ大きなものになってくるであろうと。

○大橋 そうですね。

○山脇教育長 ありがとうございます。

○大森市長 先生ありがとうございます。私からも1つだけ。

実はあの手この手というのは、先日の岡山の観光に関して人を集めてくるのに関して、全然あの手この手を使ってないと言われたこともあって、もっともとの工夫というのは結構やらないかんのじゃないかと思うんですが。

今日の先生の全体を通してのキーワードが幾つかあると思うんですが、私が1番心に響いたのは、楽しい学校、その中で本気で生徒を指導していく。そういうことが私にとって最も印象的だったんですけども、大橋理事長から見て、公立の学校の先生方、必ずしも楽しいとは思っていない。そして、必ずしも本気になってるとは思えない。その背景というのは何にあるんでしょうか。

よく言われているのは、保護者との関係。先ほど言った雑用等の問題だとか、いろんなことが言われているんですが、複合的な要因は当然あるんでしょうけども、大橋理事長から見て、何を公立の小学校、中学校の先生に感じられるか。

○大橋 幾つか今、市長が言われたこともそうだと思うんですけど、もう一つは先ほど教育長が、頑張ったら褒めてくれるというものが、学校は、先生方は少ないのかな、そういうチャンスがという気がするんです。

もっとやっぱり先生方を褒めてあげるといふ、生徒でなくても、校長先生がえこひいきとか何とか関係ない、俺の間行ってきたからこれ1つ買って来たよと、家で食べてくれよとかあっても、あの人にやってこの人にやらなかったじゃなくて、この学年にやってこの学年になかったでもいい、この間は頑張ったよなというところがあるんだったらいいんじゃないですか、もう。

校長先生の独善でいいから、褒めるところは褒めていくとか。ボールペン1本でもいいんですけど。この間、生徒が先生のことを褒めていたよと。これ私が買って気に入ってるけどという、たった1本のボールペンでもいい、私はあげたって別に構わないと思います。

校長先生が教育の最後をなし遂げている期間で、教育者の鏡のような形にいる校長先生を求めてはいけないと思うんです。もっと泥臭い経営者になっていただかないといかないんじゃないでしょうか。学校のトップですから。

そういう点での校長研修というか、教頭先生もなさってるんですけど、学校経営という部分での校長色を、先ほど言いましたように、思い切って出してもいいよという中でも褒める、先生を褒める。どうして褒めた、どんなことで褒めたというのは、校長会で話題になるようなことがあってもいいのかなと思ったりもしています。

○大森市長 ありがとうございます。本当に貴重なお話、我々の胸に響きました。大橋理事長の言葉をこれからどうブレークダウンしていくのか、きちっとやっていきたいと思えます。本当に今日はどうもありがとうございました。

では、ありがとうございます。

続きまして、協議事項にベネッセの西島さんから学習の動機づけについてお話をお願いいたします。

○西島（ベネッセ） ベネッセコーポレーションの西島でございます。

大橋理事長のすばらしいお話の後に、データの御紹介という形になってしまい大変恐縮です。前回、動機づけについてということで宿題を頂戴しておりましたので、データ等に基づきまして御報告をさせていただきたいと存じます。お手元では資料1ということで資料を御用意いたしております。

学習の動機づけということで、4ページから始まってございます。

前回、内発的動機づけが大事だというお話を申し上げまして、それについて詳しくレポートするようという御指示をいただいております。

まず最初に見ていただきますのは、ある書籍にあったものを再編したのですが、「アメとムチ」ということで、よくある実験で、餌と電気ショックのT字路を用意した実験の中で、Aでは餌と電気ショック、Bでは電気ショックのみ、Cでは餌のみということで実験をしてみると、AもBも実は、Aは餌があるので動きそうですがちょっと電気ショックに触れるともう動かなくなると。Cは餌があるのでしばらくはそこに向かっていくんですが、途中でもう動かなくなるということで、ここから2つのことが実はわかります。

1つは、Cだけが動くというのは、AもBも失敗を恐れる環境にあるということです。Cは失敗がない環境ですので、失敗を恐れなくてよい環境にあるとマウスはとてもよく動くというのが1つ目。

そして2つ目は、Cがそれでも途中で動かなくなるということで、同じ餌ではなかなか動かない。つまり、餌があるという外的な刺激づけだけでは限界が必ず来るということ。この2つのことがわかります。

失敗を恐れない環境づくりが必要であることと、外的な動機だけでは限界が来るということ、この2つのことがこの実験からはわかります。

そこで、外的な動機だけではなくて、さまざまな動機づけ、先ほど大橋理事長からも

あの手この手というお話がありましたが、さまざまな動機づけを学校では既に行われていると思いますが、教育の観点の中で動機づけを次のページで4つに整理をしています。

外的な動機づけ、叱られる、褒められるそういったものです。

取り入れの動機づけ、こちらは、どちらかということ子どもたちのほうからの視点で、周りとの関係で頑張ろうという気持ちになる、勉強しなきゃいけないという社会的な感性ですとか、あるいは、成績が悪いと恥ずかしい、負けたくないといった周りとの関係の中。

同一化的動機づけは、自分の中での夢をかなえたいですとか、役に立つ人間になりたいですとか、いい高校に入りたいと、そういった自分の中での動機づけ。

最後、一番右が内発的動機づけということで、新しいことを知ることができてうれしいですとか、問題を解くことがおもしろい、勉強すること自体がおもしろいという、新しいことにチャレンジする、周りとはともかく、あるいは自分自身の将来が云々ということもともかく、とにかくチャレンジするプロセス自体が楽しいという動機づけ。これを内発的づけと位置づけています。プロセス自体が楽しいというのが非常に重要だと考えております。

では、どういうふうを考えていったら内発的動機づけにつながっていくのかというのが次のページでございます。

6ページのところ、さまざまな刺激といいますか、アウトプットになるものが並んでおりますが、いろんな心理調査の中で、この一番左にあります自己効力感、こちらがいろんなことの根源にあると言われております。この自己効力感がしっかりと育っていると、そこから右にあるものはうまくいきますということが、基本的な統計的なデータでよくいわれることになります。

ですので、この自己効力感をいかに高めるかということが今教育の中では重視をされているところでもあります。

また次のページにあります、この学習の動機づけ、先ほど言いました4つの種類に分けた動機づけをグラフに示しておりますが、それぞれのグラフ、左から4年生、5年生、6年生、中1、中2となっております、内発的動機づけ、中学生になった途端にぐんと下がるという状況にあります。

これはさまざまな小学校と中学校の環境の違いから起こることだと思っておりますが、どう

しようもない環境の違いもあると思うんですが、やはり小学校と中学校の違いの一番大きなところは、学級経営に対する先生方の研さんの状況かなという気がしています。

最近、小学校の先生方、私的な集まりの勉強会では学級経営の勉強会がすごく盛んに行われています。ただ、中学校の先生は教科の先生ですので、学級経営というところにはなかなか行かないところもありますので、この学級経営の小学校の手法をいかに中学校でうまく学齢に合わせた形で展開していくところが重要になるのかなと感じております。

また次のページですが、少し古いデータで恐縮ですが、夢を持っている子どもたちのほうが自己効力感が高い。あるいは、自己効力感が高い子どもたちは夢を持っているとよく言われます。

そこで夢ですとかなりたい職業のデータですが、これ少し古いですが、2004年と2009年を比べたところ、2009年になりますと中学生以上になりますとなかなか夢が持ちにくいと。なりたい職業が描けないという子どもがふえている。描けた子どもが減っている状況にあるようでございます。

岡山市でも中学生はみんな、多分100%職場体験ということで、キャリア教育の一貫として職業について考え体験をしということをやられているかと思います。全国的にもそういうことをやっているんですけども、最近よく言われるのが、もう20年後には今ある職業のうちの何割かはなくなると。新しい職業ができるとよく言われます。

職場体験、職業観ということも当然大事ですが、それ以上に大事なのが、キャリア教育の本質は何かきちんと立ち返ることかなと思います。

自己効力感や内発的な動機づけを高めていくためには、先ほどもありましたが、他者からの需要度も非常に重要になってきます。周りとの関係の中で自分の効力感を高めていくことを考えると、周りとの関係をいかにうまくつくっていくかが重要になってくると思います。

私も実は五、六年前にある会社の仕事で環太平洋大学様にお世話になってよく通っていたんですが、本当に先ほどからお話があったように、学生さんたちの挨拶、すばらしいと思いますし、掃除も自分たちですするという形で、それこそがキャリア教育になっているんだなと感じています。

よく荒れている学校という言い方をされる学校がありますが、そこをうまく改革をしてこられたところは、挨拶と掃除とマナー、ここを重視して教育改革をしたことで学

校が落ちつき学力も上がったとよく聞きます。そういった、本当に根本的なところにキャリア教育の視点を持って行って、なりたい職業のところも大事ですが、そっこのほうに視点を移していくことが動機づけのためには必要かなと思っています。

次のページからは自己効力感と幾つかのこの関係ですが、こういう子どもたちは自己効力感が高いですよというのが数ページ続いております。

1つ目、9ページは、友達から受容されていると感じていると。これはやはり、人との関係の中で自分が周りに受け入れられていると。

10ページは、自己決定をしている子ども、自分で決められるというのが自己効力感につながっているということ。

それから11ページは、母親からの励ましを受けている。褒められているということだと思いますが、励ましを受けている。

さらに次の12ページは、結果よりも努力を評価してもらっている。プロセスを評価してもらっているというところなんです。結果が出て褒められるとなると、結果が出ない子どもは褒められないということになりますので、そうではなくて、努力のプロセスを評価している親御さんのお子さんのほうの自己効力感が高くなっています。

恐らくいろんな活動の中で、結果が出て残念ということもあると思いますが、そうではなく、努力をしたことを褒めるところに視点を移していくのが1つのポイントだと思います。

そしてさらに、保護者の働きかけが重要なのは13ページにあります。小学校よりも中学校であるといえます。先ほど中学校になると内発的動機づけがぐんと下がるというグラフをごらんいただきましたが、それと似通った形になりますが、これは全国調査の特別処理といいますか、保護者の方の調査にクロスして調査をした年があるんですが、保護者の方の調査と全国調査の子ども結果の相関を見たときに、特に中学校におきましては国語A・B、数学A・Bどれにおきましても、子どものよいところを褒めるなどして自信を持たせるようにしていると保護者の方が回答されたお子さんの成績が高いです。当てはまらないという方のほうが下がって行ってしまおうと。

小学生は、余り中学生ほど明確な相関はないですけれども、したがって、内発的動機づけが下がってくる中学生において、なおさら自信を持たせるような保護者からの働きかけが重要であると言えます。

次のページですが、それをさらにもう少し発展させて見ていったときに、これは左側

に成績上位層の小4から中2までの保護者の方の回答で、真ん中にあるようなことを子どもに働きかけていますという、イエスと答えた方のグラフになります。右側は成績が余りよくない子どもたちの保護者の方の同じものの回答になりまして、丸をつけているところが成績上位、下位で差が大きいところとなります。

こうやって見ていただきますと、内発的動機づけの支援にかかわる下の3つで、特に差が大きいところが多いですが、これらの働きかけを保護者の方がすることで成績にかかわってきているということもあります。

なかなか一般の多くの保護者の方がこういった、ここに書いてあるような身近なことに関連づけて考えようねとか、算数の考え方おもしろいよねとか、なかなか伝えにくい、難しいところではあると思いますが、保護者の方がこういうことができるような支援を学校としてやっていくことも考えられるのかなと思います。

今までの分は全国的なデータでしたが、次のページは岡山市のデータをお預かりしているものから抽出をしたものになります。昨年度の全国調査のデータから見たときに、実は自尊感情、自己効力感にかかわるところは比較的高い数字をとられている状況です。児童・生徒に質問したものです。

全国とほぼ変わらず、あるいはプラスに働くところが大きく、将来の夢、目標というところが若干低いというのは小学校、中学校ともに、次のページが中学校ですが、同じような傾向でございます。

決して自己効力感あるいは動機づけというところで岡山市として大きな課題がある状況ではないと考えていいかと思いますが、それでもまだまだ、もっともっとできることはあるという状況かと存じております。

では、どのようなことができるかということで、次のページからは他地区の小・中学校の事例を幾つか書いております。

指導の中身について論ずる場ではありませんので、ざっと参りますが、まず最初は朝倉小学校ですが、こちらは話し合い活動を軸にして、一番右下、成果のところにあります。 「自分たちが授業をつくっている」という意識をつくっていくことをされています。

最初に内発的動機づけはプロセスにとってもかかわっていると申し上げましたが、学ぶプロセスを改革していくと。決して先生が子どもに対して教える時間をしっかりつくるのではなく、そういった時間を減らして、子どもたち自身が授業をつくっていると

感じられるような授業設計をされています。

次のページ、さいたま市立高砂小学校さんも大体似たような形ですが、学びの意味や楽しさを実感できるように、授業で子どもたち同士のコラボレーションを大事にしてやっています。

コラボレーションと今申し上げましたが、ことしPISA2015ということでOECDの調査がありますが、その中でも、この協同的問題解決力がすごく重視をされています。これからの日本の教育はOECDの掲げる世界の標準の教育に近づけていこうと文科省も言われていますので、表ではありませんが、裏で言われていますので、恐らく協同的な問題解決力はすごくこれから重視をされていくと思います。

ここでもそういった活動の中で、成果の一番下にありますように、教師から褒められるだけでなく、友達から認められることで、自己肯定感が向上すると書かれております。

次の田代中学校の取り組みの最大のポイントは自己決定だと思います。中学校でするので、テスト前には勉強期間があって、その中で「今日のがまん」というのが左の画像の中にありますが、今日、私はこれを我慢して勉強に向かうんだという我慢をする項目を自分で決めて、自分で決めたことに対してどうだったかを振り返っています。決して押しつけではなく、自分で決めて動くことを習慣化している取り組みであります。

次のページ、福生第一中学校になります。こちらでも班単位での動きをすごく重視をしていくとか、あるいは勤労観、自己肯定感の醸成のために、保育園、高齢者福祉施設でしっかりと体験することで、人のためとか、グループのためとか、チームに対する貢献とか、そういったことを意識した指導をされています。

成果としては、高校を中退する生徒が急速に減少したということで、やはり心を育てるといいますか、気持ちを育てるということで、子どもたちの行動が変わっていったと思います。

最後のページは大学との連携ということで、まさに先ほど御提案があったようなことですが、信州大学教育学部の、留学生も含めて中学校とコラボレーションしていく中で、子どもたちの英語の学習に向かう気持ちを変えていった事例でございます。

いずれにしても、人との関係の中で教育が成立しているという、あるいは人との関係の中でさまざまな課題が解決され、子どもたちのモチベーションが上がっている事例でございます。

もちろん岡山市の小・中学校でもそういったことが行われていると思いますが、コミュニティスクールという位置づけもありますので、学校の中の人との関係だけでなく、外との関係も含めて、どのような人たち、たくさんの人々の中で子どもたちが育っていく場を設計していくかが大事なポイントなのかと感じた次第でございます。

以上になります。ありがとうございました。

○大森市長 ありがとうございます。今の西島さんの御説明に対しまして、御質問があればお願いいたします。

○曾田教育委員会委員長 ありがとうございます。

ほかの調査にも出ているんですが、岡山市の子どもたちは自尊感情が高いんですね。そして、人のために役に立ちたいというのが全国平均よりも高く、この数年、それについて私たちはいいことだなと思っているんですが、しかし、何年も、それと学力とがリンクしないんです。

それが、ここの中にある因子の何と一番近いのか。さっき言われた自尊感情のところも、先生から認められている自尊感情が高いのがリンクしやすいのか、友だちから認められているのが高いのかどうか。そういう細かい分析が欲しいかな、聞きたいかなと思ったんですが、そのあたりはいかがでしょうか。

○西島（ベネッセ） 学力に対する自己効力感というのは、当然、大事なファクターになってますが、岡山市の場合はそこは余り問題がないとしたらほかに問題があると考えべきだと思いますし、全国調査のデータを拝見すると、やはり項目の細かい名称は忘れましたが、落ちついて授業ができる環境にあるのかというところが低かったですね。そこはやはり大きな課題ですし、そこをしっかりと課題解決していかないといけない。ここに問題はないけれども、違うところに問題があると見たほうがいいかなと思います。あとは、校長先生が教室を見て回られる頻度もかなり低かったと思います。開かれた学校、教室づくりと申しますか、授業づくりと申しますか、そういったところに視点を移して解決をしていかなければいけないのかなと思っております。

○曾田教育委員会委員長 ありがとうございます。

自尊感情に関しては、多分ここ10年ぐらい愛されていると実感できるというフレーズをスローガンにしていた時期があって、やっていることは現場に生きているんだなという感じはします。だから、逆に言えば、やらないことは全く生きていないということで、そこをやっていかないといけないのかなと思いました。ありがとうございました。

た。

○大森市長 ほかにありますか。

私から質問ですけれども、後ろのほうに出てる、秋田の横手市の小学校の取り組みということで、話し合い活動を軸とするとか、さいたま市は学びの意味や楽しさを実感する。あとは計画どおりできたと、こういう言葉が並んでいます、この前、高校の恩師と食事をする機会があったんですが、彼がいわくは、もちろん程度の問題はあるんですけど、やはり小学校、中学校というのは、ある程度、知識を教え込む。そして1つの訓練の場でもあるという要素があるんじゃないかと、相当の勢いでおっしゃってたんですが、コミュニケーション、そしてお互いが話し合っただけで楽しみを見つけていく、こういったものとのバランスというか、どのように考えておられるのか。もし差し支えなければ、大橋理事長からも、そのあたりの感じを教えてくださいませんか。

○西島（ベネッセ） 本当におっしゃるとおり、最近、協同学習ですとか話し合い活動というのはかなり広がってきております。

失敗するパターンというのは、まさに今、市長が御指摘になりました、知識をおろそかにして、まず話し合ってみようということをやってしまう先生が失敗します。必ず個人の学習をしっかりとやった上でグループの学習に入り、それを教室全体で共有し、もう一回最後に個人に戻るという学習の流れをきちんとつくって運営をされている授業でないと、話し合いだといって「みんな、さあ話せ」と言っても必ず失敗します。

それはなぜかという、やはり話し合いをするためには一定の知識が必要で、それをもとに話し合いをしていくことになりますので、そこをおろそかにはできないという意味では、おっしゃるとおりしっかり教える段階はとても重要です。

ただ、大きな流れで言うと、計算はパソコンがやってくれますし、調べればいろんな情報が出てきますので、知識自体はたくさん自分の外にあると、それはとりに行けばそれはその場で必要なものが得られるという大きな社会の構造変革はある程度踏まえなきゃいけないなと思います。

そのような社会の中で、私どもの会社もそうですけれども、1人で解決できるということはほとんどなくて、やはりチームでどうやって解決していくかということ、知恵を出し合い、力を出し合いながら先に進んでいくという社会構造になっている以上は、やはりその力、コラボレーションして何かをつくり出していく力というのは、子

どものときから身につけていかなければならない力だと思います。

バランスとおっしゃいましたが、両方やれというのがバランスだと私は認識をしています。

○大橋 我々の大学も、ことしぐらいからそういう時間をふやしてきているように思いますね、各先生方が。

大学生でもグループごとに何かを調べ何かを語り、あるいはプレゼンをして、そのときにそれぞれの発表が終わったときは、必ずその部屋全体の人間で拍手をするということですが、間違っていることもあるかもしれませんが、自分たちの意見と違うことがあるかも知れませんが、そこまでみんなでまとめたことに対してをたたえていくということをやると、比較的みんなそれぞれ失敗してもよかったなという感じで、意見が違っててもみんな拍手をくれたというので、また次への、遠慮なく自分の意見を言いやすい環境づくりというのは大事なような気がしています。

○大森市長 ありがとうございます。

では、塩田さん。

○塩田教育委員 内発的動機づけが大切だということで、前、家庭のお母さんでは難しいんじゃないかということを申したんですけども、今日ここに改めて内発的動機づけの定義みたいなものを見てみると、今回、教科書選定でかなり教科書をいろいろ読ませていただいたんですけども、こういう形の工夫が今の教科書はされているんだなと感じました。うまく取り上げられているところもあるかというところで見させていただきました。

それと同時に、見ていて家庭というか、保護者の働きかけというのは、かなり大きいと。本当に戻ることができたらと、今これを見て改めて感じているところですが、こういうのは、今、岡山の保護者の皆さんにぜひ知らせていって、家庭の動機づけのところ、勉強を教えるなくてもいいけれども、動機づけのところをしっかりとやっていただきたいということを、そうするにはどうしたらいいとか、そういうことを感じました。

済みません、感想になりますけれども、重要なことかなと思いました。

○大森市長 何かあれば。

○西島（ベネッセ） 家庭の方への働きかけは非常に難しく、よく言われるんですが、働きかけをして聞いてくださる御家庭はもともとしっかりやってらっしゃるところだ

ということもありますので、やはりこれを言うてしまうとしようがないんですけども、学校で担わざるを得ない部分もあるのかなと思いますし、もう一歩先に行くと、コミュニティスクールのあり方をもっともっと深めていくことで、地域と学校と家庭のあり方がもっともっとうまく回っていく可能性を秘めていると思いますので、そこをうまく深めていけないかなと感じたところでございます。

○山脇教育長 この内発的動機づけについては、先ほどの大橋先生のことともつながることではないかなと思います。岡山市の子どもたちにとって1つの課題が、下位層といいますが、下位層のところの子どもたちが若干少しこぶがあるんです。

その子どもたちに対して、先ほどからの話し合い活動であるとか、そしてまたお互いの協同学習という形態の中で授業を展開していこうと思うと、基礎的なところといえますか、話し合う材料を持ってないと子どもたちも話し合うことができない。しかしながら、下位層の子どもたちにはその前の段階の本当に計算はどうか、書くことはどうか、読むことはどうか、語句の意味はどうかというあたりからしてやっていかないと追いつけないところがあるんです。

そのあたりは、動機づけということと関連して考えたときに、下位層の子どもたちにはどうそのあたりを手当てしていくべきなのかなということを感じたものですから。

○西島（ベネッセ） ありがとうございます。今、全国的な自治体の取り組みでふえてきているのは、やはり授業では、先ほど言いましたようなコラボレーションの学習、子どもたちが集まっているからこそできる学習をふやしていこうとしておられて、じゃあ個別の学習をどうするのかといったときには、もちろん家庭でということに期待はされますが、そこに結果が出てこない場合が多いですので、放課後学習の充実というところ、あるいは土曜学習の充実というところはかなり動きが出てきていると思っています。

今、日本で1番それを先に自治体として取り組まれたのが大分県の豊後高田市ですが、そこでは公民館を中心に子どもたちが集まって、放課後それから土曜日に学習ができる環境をつくり、そこに高校生が来て教えてくれたり、あるいは市の職員の方がボランティアで行って教えたり、もちろん元先生の方、校長先生、卒業された先生方も教えに行ったりということで、さまざまな地域の方々がそこで学習の支援をされているということがあります。

そんなこんなで成績が物すごく上がっている市でございますが、そこを皮切りにいろ

んな自治体で放課後学習の充実をやっておられて、岡山県内でも赤磐市ですとか、今、実験的ですけど和気閑谷高校を中心に和気町でいろんな取り組みを始めたりとか、さまざまな県内の取り組みも始まっていると思っております。

○大森市長 よろしいですか。

西島さんの御説明につきましては、ありがとうございました。このあたりで終わらせていただきたいと思います。

では、当面の進め方について事務局からお願いいたします。

○事務局 資料2、当面の進め方について説明させていただきます。時間の関係もございますので、2ページをごらんいただきたいと思います。

これまで、本日を含めまして3回の会議を開催させていただきました。今後につきましても、当面の進め方といたしまして、今年度さらに数回、会議を開催させていただきます。例えば校長会といった教育現場の方の声を聞いて、教育環境なり学力向上について御協議をいただく。あるいは教育委員会、福祉部局、子育て部局、こういった職員もお招きをして、福祉と教育との連携について御協議をいただく。また、来年度に向けての重点的に講ずべき施策の検討を御協議いただく。こういった運用をしてまいりたいと考えております。

以上でございます。

○大森市長 とりあえず次回はどういうことになりますか。

○事務局 次回でございますが、よろしければこれまでの御意見、今日大橋先生からいただいたお話、こういうことを踏まえまして、さらに教育現場の声を聞くということで、校長会をお招きして御意見を聞く。あるいは、教育の現場の方のお話を聞く。こういったことをさせていただいて、教育環境ですとか学力について御協議いただければと考えております。

時期につきましても、9月当初ぐらいで日程を調整させていただければと考えております。

○大森市長 わかりました。

今の大橋理事長の話からいっても、校長会の話というのは、結構、重要な点になると思います。もし校長会で、もちろんお話を決めていただこうと思いますが、こんなことをスピーチの中に項目として入れてほしいとかあれば、また教えていただければ、それは校長会の代表にもお伝えさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願

いたします。

では事務局、ここで締めてよろしいでしょうか。

では、本日の協議はこれまでといたします。最後に事務局から一言お願いします。

○司会 ありがとうございます。次回の会議につきましては、先ほど申しあげました9月の頭で日程を調整させていただきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

以上で平成27年度第3回岡山市総合教育会議を閉会いたします。お疲れさまでございました。